

草の芽句会たより

NO,102
29, 2, 2

紅梅の花のたしかさ咲ききりて
黙々と城巡る人春寒き 節子

嬉しさや三日続きの冬日和
風雪に堪えて城壁冬ざる 貞

動線の短くなりて冬深む
木漏れ日の林を抜けて梅園へ 純子

寒鳩の同じリズムで鳴き続く
足元に湯たんぽぽかぽか眠りけり 禮子

虚子の句の日差し明るく春隣
お天主や青空にあり春近し 貞子

お天守に冬日溢るる楡大樹
二の丸のまだ咲き継いで冬桜 剋子

虎落笛今日の仕事はこれまでに
水仙を剪れば朝の雫散る 文子

腹白き小鳥の去りし寒椿
齒を病みし八十路の兄に寒卵 範子

ひと仕事終へし安堵や春炬燵
春草の苔分け出づるうれしさよ 芳子

出席者 真鍋 氏家 馬場 川原 森 小山
投句者 大黒 吉崎 小林

お正月気分がまだ抜けきらないというのに、早くも二月である。明日は節分、そして立春。月日の過ぎる速さに目が回りそうである。天主閣の空は青く晴れて、遠く広がる瀬戸の海も青い。お天気がいいせいか散策の人が多く、すれ違うごとに挨拶をしてくれる。下萌えの径を辿り梅林へ。風に梅の香りが漂っている。梢に鳴く冬鳥の声が、移りゆく季節を告げているよう。吹く風はまだまだ冷たいけれど、どこかに春・・が感じられる今日の城山であった。

